女子大國文　第百七十八号　令和八年一月三十一日

学習院大学所蔵『万葉聞書』について

――解題と翻刻（下）――

江富範子
柴田清子

本稿は、学習院大学所蔵『万葉聞書』を翻刻したものである。前稿（本誌第百七十七号、令和七年九月発行）の解題と、巻八、巻九の翻刻に続いて、巻十一の翻刻をここに掲載する。

翻刻　学習院大学所蔵『万葉聞書』

凡　例

一．学習院大学所蔵『万葉聞書』を可能な限り原本に忠実に翻刻した。

一．翻刻に当たっては、次のような方法を取った。

1．一行の字詰、字の高さ、字の大小は、概ね原本に従った。

2. 漢字・仮名の区別をはじめ、宛字、仮名遣い、送り仮名、振り仮名などは、全てもとの通りとした。ただし、漢字・仮名の区別にあたり、本文が漢字原文か仮名書きかを判断しかねる場合（例、一四六一番歌「夜るは」の「夜」）、後考に備え、漢字で示した。
3. 原本の誤字、脱字、衍字などは、そのまま翻刻した。
4. 漢字の字体は、概ね校本万葉集の異体字表に準拠しつつ、原本の一々の場合に近い正字体または常用漢字字体にし、二、三原本の字体のままにした。
5. 仮名字体は、現行の仮名字体とした。
6. 虫損、汚損などにより判読不能な場合は、□を以て示した。その際、原字の一部が見え、概ね判読可能な場合は、□右傍に（　）括弧を設け、その文字を（カ）と注記した。
7. 補入記号のある補入は、概ね原本通りの体裁で示した。
8. 消した文字は（　）括弧で囲み、上または傍に（消）と注記した。重ね書きによる訂正は、翻刻本文には最終の文字を記した。塗抹した文字は■で以て示した。当初の文字が概ね判読可能な場合は、左傍もしくは右傍に＊を付し、脚注で補足説明をした。その他、説明を要する箇所については、同じく左傍に＊を付し、脚注で補足説明をした。
9. 丁数は、各表裏の区切りに」印を施し、その右に丁数を意味する数字と、**オ**（表）・**ウ**（裏）の略号を以て示した。

一. 翻刻本文の上段に、検索の便を考えて、『国歌大観』（旧編）の『万葉集』歌番号を付した。

一. 翻刻本文は、江富範子と柴田清子が協議の上、作成した。

第十一

古今相聞往来歌類之上

旋頭哥

2351 新室(ニヒムロ)の壁草かり御座(ミマシ)給はね
2353 長谷(ハツセ)の弓槻(ユツキ)かしたにわかかくせる妻
2354 健男(マスラヲ)の――
2356 狛錦紐のかたへそ床に落にけるあすのよもきなんといはゝとりをきて

またん

2357 朝戸出の君か緒(アユヒ)を閏露(ヌラスツユ)原
2359 息の緒にわれはおもへと
2361 天在(アメニアル)一ッ棚(タナ)橋いかて行らん
2362 開木代(ヤマシロ)の来背(クセ)のわかこほしといふわれ
2363 岡前(ヲカサキ)のたみたる道を人なかよひそ
2364 玉垂の小簾のすけきに入かよひこね たらちねの母か問(ハレ)ハ風と
2365 申さん

内日さす宮ちにあへりし

正述心緒

」一五オ

2368 たらちねの母の手放(ソキテ)かくはかり無為便事(スヘナキコト)はいまたせなくに
2369 人のぬる味宿不(ウマイモネ〇ステ)レ寝早敷(ハシキヤシ)八四きみかめをすらほしみなけくか
2371 心には千遍(チエ)におもへと

2373 何時(イツトテモ)恋ぬ時とはあらね共夕方(ユウカタマ)■(*ケ)テ狂恋はす(無乏)へなし
2376 健男(マスラオ)の現心(ウツシコヽロ)も我はなし
2378 吉恵(ヨシエヤシ)哉きまさぬ君を
2380 早敷(ハシキヤシ)哉たか障(サヘ)てかも玉桙の
2382 打日さす宮道の人――

2384 我せこはさきくいます(幸座)とかへりきて
2385 麁玉(アラタマ)の五年(イツトセ)ふとも
2386 石(イハ)をすら行とをるへき健男も恋てふ事は後(ノチ)の悔(クイ)あり
2389 烏玉のこの夜なあけそ朱引朝(アカラヒクアサ)行君をまてはくるしも

2390 恋をして死(シニ)する物にあらませは我身は千たひしにかへらまし
2391 玉響(タマユラ)に昨日の夕みし物を
2393 玉桙の道をゆかすしあらませは■(シ)ノヒニ恋にあはましや

」一五ウ

*■モト「カ」カ

2394 朝影にわか身はなりぬ玉垣の入風にみえていにしこ故に
2395 ゆけと〳〵あはぬ■いもゆへ久方の天露霜にぬれにたるかも
2398 年切及世さためて――
2399 朱引はたもふれすてねたれとも
2403 玉久世清き川原に身祓して
2405 垣廬鳴人は云へとも狛錦
2407 百積舩潜いるゝや占刺母は問とも其名はいはし
2408 眉根削鼻鳴紐とき待らめや
2411 白細布の袖を小■端みしからに
2413 故なしにわかした紐のとけたり（は）（消）人にしらすなたゝにあふまて（及正逢）

2414 恋しきを意追不得出行は山ｏ川ｏしらす来にける物を

寄物陳思

2415 處女等を袖ふる山の水垣の久しき世よりおもひきわれは
2417 石上のふるの神枌神なれや
2418 いかならん神に幣をも嚮奉
2421 くる路は石踏山もなくもなくもかも我待君か馬つまつくも

」一六オ

2422 いはねふみかさなる山――
2423 路の後(シリ)ふかつ嶋山しはらくも――
2424 紐鏡(ヒモカ、ミノトカ)能登香の山もたれゆへか君きませるに紐とかすねん
2425 山科の強田の山に馬はあれと
2428 千早(チハヤ)ふる 宇治 うちのわたりのはやき瀬に
2429 はしきやしあはぬこゆへに 徒(イタツラニ) この川の瀬に裳の襴(スソ)ぬらす
2430 此川の水阿和逆纏(ミナアハサカマキ)行水の――

2431 鴨川の後瀬(ノチセ)しつけみ――
2432 言に出て云はゝ忌々(ユヽシミ)山川の
■■■■

2433 水の上に如数(カスレカク)書(コトキ)わか命
2436 大舩のかとりの海
2437 奥藻(オキツモ)を隠障(カクサフ)浪の五百重浪(イホヘナミ)
2440 近江の海奥滂舩に重下(イカリヲロシ)
2442 大土(オホツチ)もとれはつくれと世中につきせぬ物は恋にそ有ける
2443 隠處(カクレカ)の澤泉(サハイツミ)なる石(イハ)の根のかよひてそ思わか恋らくは
2444 白檀(シラマユミイソ)石(トキハ)への山の常石なる

「一六ウ

2445 淡海の海しつむ白玉
2449 香山(カクヤマ)に雲位(クモヰ)たなひき
2450 雲間より狭径(サワタル)月の
2453 春楊(アヲヤキ)の葛(カツラキ)山に立雲の
2456 むは玉の黒髪山の山草(スケ)に小雨ふりしきます〳〵そ思

」一七オ

2459 我せこか濱行(ハマユク)風のいやはやみとき事ましてあはすかあらん
2460 とをつまのふりさけみつゝ偲(シノフ)らん是月(コノ)の面(フモ)に雲なたなひき
2461 山の葉に追出(サシル)月の端(ハツ)〳〵に
2464 若月(ミカ)のさやかに
2465 わかせこにわか恋をれはわか屋との草さへ思(ヒ)うらかれにけり
2466 朝茅はら小野に印空事(シメユフソラ)をいかなりといひて君をはまたん
2467 路のへの草ふか百合(ユリ)の後にてふいもかみことをわれはしらめや
2468 潮葦(シホアシ)にましれる草のしり草(知)の人みな知ぬわかしたおもひ
2469 山葛芦(ヤマチサ)の白露おもみ浦ふれて心にふかくわか恋やまめ

（萬）（消）萬歟

2470 潮椀(シホノエ)に延子菅(ネハウコスケ)のしのひつゝ君に恋つゝありかてぬかも
2471 山代の泉の小菅をしなみに
2472 みわたせは三室の山の石穂(イハホ)菅

2473 菅の根の惻隠(シノヒ)に君か
2474 山菅のみたれ恋のみ
2475 我屋との（影）(蔭)のした草おふれとも
＊(消)

2476 打田(ウテルタ)に稗(ヒエ)は数あまたありといへと
2477 あしひきの名にをふ山すけ押伏(フセ)て君しむすはゝあはすあらめや
2478 秋柏潤和川(アキカシハヌルヤ)邊の細竹(シノ)のめに人もあひみし君にまさらし
2479 椀葛(サネカツラ)後にあはんと夢にのみ
2480 路のへの壹師(イチシ)の花のいちしろく
2483 敷たへの衣手離(カレ)て
2486 珎の海の濱邊の小松
或本塩干の
2487 平山(ナラ)の小松か末にあれ（は）(消)こそは——
2488 礒の上に立廻(タチマフ)—香瀧の心いたみ

「一七ウ

＊（消）ココハ見セ消チ

2489 橘の本にわれたち下枝(シツ)とりなりぬや君ととひしこらはも

」一八オ

2490 天雲にはねうち附(ツケ)て飛鶴(タツ)の
2491 いもこふと不レ寝朝明(イネヌアサケ)をし鳥の
2492 おもふにしあまりにしかはにほ鳥の足ぬれくるを人みけんかも
2493 たか山のみね行完(シヽ)の友おほみ袖ふりこぬをわするとおもふな

2494 大舩にまかちしゝぬき榜ほとを極(イタク)■*太(ナ)恋そ年にあるいかに
2496 肥人(コマ)の額髪(ヒタヒカミ)ゆへる染木綿(ソメ)の染し心をわれわすれめや
2497 早人(ハヤ)の名におふ夜音灼(ヨコヘイチ)―然(シルク)わか名をいはゝつまとたのまん
2498 劔刀諸刃利(ツルキタチモロハノトキ)にあしをふみ
2500 朝月日むかふ黄(ツケ)―楊櫛(クシ)ふりぬれと何しか君かみれとあかれぬ
2501 里遠み浦ふれにけりまそ鏡
2502 眞鏡手にとりもちて朝な〳〵みれとも君をあく事もなし
2503 夕されは床(ユカ)のへさらぬ黄楊(ツケ)枕

」一八ウ

2504 解衣(トキヽヌ)の恋みたれつゝ浮てのみ沙(マサコ)なすわか恋わたるかも
2506 事霊(コトタマ)の八十(ヤソ)の衢に夕占(ユウケ)問占(ウラ)まさにいへいもにあひよらん

*■モト「な」

2507 玉桙の路往占にうらなへは
2508 皇祖の神の御門をかしこみと■*侍従時にあへる君かも

2509 真鏡みともいはめや玉限石垣渕ののかくれたるつま
2511 こもりくの豊泊瀬道は常滑のかしこき道そ
2512 味酒の三毛侶の山に
2513 雷神のしはしとよみてさしくもり雨のふらはや君かとまらん
2519 奥山の真木の板戸ををしひらき
2520 苅薦の一重をしきて紗眠とも
2521 垣幡にほへる君をいさなみにおもひいてつゝなけきつるかも
2523 散頬相色にはいてす

2526 待らんにいたらはいもかうれしみと咲儀を行てはやみん
2530 あら玉の寸戸我竹垣あみめにもいもし（消）（みえ）見なはわれ恋めやも
2533 面忘いかなる人のする物そ
2535 凡のわれは思はす——人に事痛——
2538 獨ねに茨くためやも綾蓆緒になるまてに君をしまたん
2540 振別の髪を短ミ青草の髪にたくらんいもをしそ思

」一九オ

＊モト「徒」カ

2549 2548 2547 2546 2542 2541

徊(タチ)―徘徊(ワカレユキミ)箕の里にいもを置て
若草の新(ニヰ)手枕を巻そめて
おもはすにいたらは妹かうれしみとるゑまん眉曳(マヒキ)のおもほゆるかも
かくはかり恋ん物そとおもはねはいもか手本をまかぬ夜もありき
かくたにもわれは恋なん玉梓(タマ■ツサ)の
いもこふとわかなく涙しきたへの枕とをりて袖さへぬれぬ

」一一九ウ

2580 2579 2578 2575 2574 2571 2565 2560 2556 2555 2550

立ておもひゐてもそ思
旦戸遣(アサトヤリ)をはやくなあけそ
玉垂の小簀(コス)の垂簾(タレス)をゆきかちに
人もなくふりにし里にある人を愍久(メクク)や君か恋にしにけん
花細葦垣(ハナクハシアシカキ)こしにたゝ一目
大―夫(マスラヲ)は友の驂(トモソメキ)ニなくさみて心もあらん■われそくるしき
面忘(オモワスレ)たにもえすやと手握(タニキリ)てうてとも不(コリ)レ寒(ス)恋の奴(ヤツコ)ハ
まれにみん君をみんとそ左手(ヒタリテ)の弓とる方の眉根(マユネ)かきつれ
朝宿髪(アサネカミ)われはけつらし愛(ウツクシキ)君か手枕ふれてし物を
早去(ハヤユキ)ていつしか君をあひみんと思し心いまそ水―葱少(ナキヌ)―熱(ル)
面形(ヲモカケ)のわするとならは小豆鳴(アチキナク)

2581 事にいへは三三二田八酢四小九毛（タヤスシスクナクモ）
2584 大夫とおもへる我をかくはかり恋せしむるは小（ウ）可（へ）にさりける

2587 大原のふりにし里にいもを置て
2589 あひおもはす君はあるらし黒玉の夢にもみえす受旱（ウケヒ）てぬれは
2590 石根ふむ夜（ヨ）道（ミチハ）ゆかしと思へとも
2594 ゆかぬわれ来跡可（クトカ）■夜門（ヨカト）をさゝすして
2600 百世しも千代しもいきてあらめやも
2602 黒髪の白髪（シラクル）まてとむすふ君
2609 白細の袖は間結奴（マヨヒヌ）
2617 あしひきの山櫻戸
寄物陳思
2619 朝影にわかみはなりぬ辛衣襴（スソ）のあはすて久しくなれは
2621 摺衣
2622 志賀のあまの塩焼衣（雖穢）なるといへる恋てふ物はわすれかねつも
2623 呉藍（クレナヰ）の八塩の衣朝旦〳〵

」二〇オ

」二〇ウ

2626 古―衣打―棄人は秋風の
2627 被祢縷いまするいもか浦わかみ
2628 いにしへの倭―文旗帯を結ひたれ

又云いにしへの狭織の帯を

2630 むすふ紐とかん日遠みしきたへのわか木枕に蘿生にけり
2631 むは玉のくろかみしきて長夜を手枕のうへにいも待らんか
2636 劔刀諸刃のうへにゆきふれてしにかもしなん恋つゝあらすは
2637 哂　鼻をそひつる
2638 梓弓末の腹野に鷹田する君か弓食のたえんとおもへは
2639 葛木の其津彦真弓あらきにもたのめや君かわか名つけゝん
2640 梓弓引見絶見不来者こす
2641 時守のうちなす鼓かそふれは
2642 灯のかけにかゝよふうつせみの

」二一オ

2643 玉桙の道行つかれいなむしろしきても君をみんよしもかな
2644 小墾田の板田の橋のくつれなは桁よりゆかんなこひそわ□も
2645 宮木引泉の追―馬喚―犬に立民の

2647 住吉の津守網引浮笑緒の
2646 東細布空にひきこす

2648 云々物は思はす斐太人の打墨縄のたゝ一道に
2649 あし曳の山田もる翁の置蚊火のしたこかれのみわか恋をらく
2650 十寸板ふける板目のあはさらは

2651 なには人葦火たく屋の酢四タレトヲノカ妻コソ（消）（床）常めつらしき

2652 妹か髪上小竹葉野の放駒蕩行けらしあはぬおもへは
2653 馬の音のとゝ（跡杼）ともすれは松かけに出てそみつるもしは君かと
2654 君こふといねぬ朝明にたかのれる馬のあし音そわれにきかする
2655 紅の襴引道を中に置てわれやかよはん君やきまさん

一云すそつく川を

2656 天飛や輕の社の斉槻
2657 神名日にひもろきたてゝいむといへと——
2658 天雲の八重雲かくれなる神の

」二一ウ

＊■モト「カ」カ

2660 夜並(ナラヘテ)君をきませと千はやふる神の社をねか(祈カ)ぬ日はなし
2661 霊治波布(タマチハフ)神をもわれはうちすてき
2664 ゆふつくよ暁闇(ヤミ)の朝かけに
2665 月しあれはあくらん別(ワキ)もしらすして
2666 妹かめのみまくほしけく夕闇の木の葉こもれる月待かこと
2667 真袖もて床うちはらひ
2668 二上(フタカミ)にかくらふ月のおしけれと
2672 此山の嶺にちかしとわかみつる月の空なる恋もするかも
2673 湯徒(ウツロフ)　湯移(ウツロウ)

2674 朽網(クタミ)山夕ゐる雲のうすらかはわれは恋んな君かめをほり　名寄無之

「二三オ」

2675 君かきる三笠の山にゐる雲の
2677 佐保のうちに■(*アラ)下(シ)風ふけれは
2679 窓超(マトコシ)に月臨(サシ)照(イリ)てあしひきの
2680 河千鳥住澤(スムサハ)のうへに立霧の
2683 彼方(フチカタ)の赤土小屋(ハニフノ)に霖(コ)霖(サメ)ふり床さへぬれぬ身にそへわきも

＊モト「従」カ

2684 笠無(カサナシ)と人にはいひて雨乍(アマ■ツ、ミ)見とまりし君か容儀(スカタ)しそ思

2685 妹か門行過かねつ久方の雨もふらぬかそ(其)をよしにせん

2687 桜麻の苧(オフ)原の下草露しあらはあかしていゆけ

2690 白紗のわか衣手に露は置ていもにはあはす猶(タユ)預(タヒ)にして

2692 夕凝の霜置にけり朝戸出に ――

2693 かくはかり恋つゝあらすは朝に日にいもかふむらん地(ツチ)にあら申尾(マシヲ)

2694 あしひきの山鳥の尾の一峯越(ヒトヲコヘ)

2696 荒熊(アラクマ)の住(スム)といふ山のしはせ山

2698 行てみてきてそ恋しき朝香かた

2699 安太人(アタ)のやな打わたす瀬をはやみ

2700 玉蜻(カケロフ)の石垣渕(イハカキフチ)のかくれには

2701 あすか川あすもわたらん石走(イシハシ)のとをき心はおもほえぬかも

2703 真薦かる大野川原のみこもりに

2707 青山(アヲ)の石垣沼の水隠(ミコモリ)に

2708 しなかとり居名山(オク)

2710 狗山の鳥籠山なる

「二三ウ

2711 奥山の木の葉かくれて行水
2712 言急ハ中ハよとまし水無瀬川たゆてふ事をありこすなゆめ
2714 物のふの八十氏川のはやきせに
2716 高ねより出くる水の石ふれわれてそおもふいもにあはぬ夜は
2717 朝東風にゐてこす浪の
2718 高山の石本瀧千行水の
2720 水鳥の鴨の住池の下樋なみゆかしき君をけふみつるかも

2721 玉藻かるゐてのしからみうすきかも
2722 わきもこか笠のかりてのわさみ野にわれはいりぬといもにつけこそ
2724 冷風の千江の浦廻の木積なす
2725 白細砂三津の黄土の色に出て
2727 酢蛾嶋の夏身の浦に
2730 木の海の名高の（山）浦（消）に
2731 牛窓の浪の塩さゐ■*嶋響よられし君にあはすかもあらん
2732 奥つ浪邊なみのきよるさたの浦の
2738 大舩のたゆたふ海に重石おろし

」二三オ

*モト「し」カ

2739 水沙(ミサ)兒ゐる奥の荒礒による浪の
2742 牡鹿海部(シカアマ)のけふりやきたて
2743 中〳〵に君に恋すは枚の浦の
2744 鈴寸(スヽロ)とるあまの燭火(トモシヒ)よそにたに
2745 湊いりのあしわけ小舩さはりおほみ
2746 庭浄(キヨミ)奥へこき出るあま舩の

2747 味鎌(アチカマ)ノ塩津をさしてこく舩の
2748 大舟に葦荷(アシニ)かりつみ
2750 わきもこにあはて久しも馬下(ウマシモ)の阿倍(アヘ)橘の蘿生(コケムス)までに
2751 味(アチ)のすむすさのいり江のあら礒松

2752 わきもこを聞都賀(キヽツロ)野(カカ)への靡合(ナヒキ)歓(ネム)木
2753 浪まよりみゆる小嶋の濱久木
2754 朝柏閏(ヌル)や川邊のしのゝめのおもひてぬれは夢にみえけり
2755 淺茅原かり苅(刈)標さして
2757 王(オホキミ)の御笠にぬへるあり間菅
2758 菅の根の懃(ネモコロ)いもに恋せまし

「二三ウ

2759 我屋との穂蓼古幹つみ生之實になるまてに君をし待ん
2760 あし曳の山澤徊具を採ゆかん
2761 奥山の石—本—菅の根ふかくも
2762 芦垣の中の似兒草■こ余漢
2763 紅の浅葉の野らに苅草の束の間もわれわすれすな

2766 三嶋江のいり江の薦を苅に社われをは君■□おもひたりけれ
2768 あしたつの颯入江の白菅の
2770 道のへの五柴原のいつも〳〵
2771 わきもこか袖をたのみて真野の浦の小菅の笠をきすてきにけり
2772 まのゝ池の小菅（の）（消）笠にぬはすして

2774 神なひの淺小竹原のをみなへし
2775 山高み谷—邊に蔓玉葛
2776 道のへの草を冬野に履からし我レ立待といもに告こそ
2777 疊薦隔編数かよひせは道の柴草おひさらましを
2779 海原の奥津縄乗うちなひき心もしのにおもほゆるかも

」二四オ

2784　2783 2782 2780

紫（ムラサキ）の名高の浦の靡藻（ナヒキモ）の心はいもによりにし物を

さね蟹（カニ）はたれともぬれと

わきもこかなにともわれをおもはねは含（フクメル）花（ツホメル）の穂にさきぬへし

隠（シノヒ）には恋て死ぬとも三苑原（ミソノフ）の鶏冠草（カラアヰ）の花の色に出めやも

類聚古集云 鴨頭草　又作鶏冠草云々　依此義者可和月草歟

」二四ウ

（本学名誉教授・本学大学院研修者）